

流山稲門会

【交譲葉】俳句の会 報告

令和五年十二月句会（第一三九回）

兼題 「冬めく」

開催日 令和五年十二月二十三日

開催場所 生涯学習センター

出席者 七名

投句者・選句者 七名

（二点句）

人目避け寄り添う二羽に冬日向
電飾の輝き競ふ星笑ふ
そろそろと熱爛所望の夕餉かな
寿歩
寿歩
小牧

（一点句）

冬めけり今日済ませねば
成らぬこと
冬將軍楽屋を出でて出待ち中
冬日向猫は新聞踏みゆけり
冬めいて犬散歩人背を丸め
無人家の蜜柑落つるにまかせおり
そこかしこインバウンドの年の暮れ
互酬
徹心
玄鳥
夢心
互酬

（四点句）

●冬めきて菜を摘む媪影薄し 小牧

選評：あの秋の実り多き収穫の時期もやがて過ぎ、季節は枯れて冬に向かう。

「あの青々と濃い青春の時期も過ぎ、残り少ない菜を腰を屈めて媪は摘んでいる。」こんな情景がこの句から思い浮かびます。

又、この句は、与えられた兼題の季語を最大限上手に生かしていると思います。そして下の句の「影薄し」に、季節の流れの中の冬の到来の「陽ざしの弱さ」と「移り行く人の一生の黄昏時」をうまく擬人化して表現をしています。なかなか考えさせられる名句である思います。

（互酬記）

●万両の濃き紅に喜寿を知る 艸寛

選評：万両は祝花でありその深い紅色は人々を惹き付ける。作者はそんな花に自身の喜寿を重ね来し方を振り返っているのだろう。現在の穏やかな暮らしが行間から読み取れる。万両と喜寿の組合せにセンスがうかがえた。

（小牧記）

（三点句）
冬めくやしチューにバター一すくい 寿歩
極月の気分が湧かぬ高気温 徹心
澄んだ星見上げる老眼曇りなし 艸寛
小春日の読書いつしか船を漕ぎ 夢心
葉の中に淡き山茶花昼の月 寿歩

（投句）

冬めくやツリーの前に聖歌隊 玄鳥
冬めきて洒落たシャツを探す夕 艸寛
冬めきて夜警の時間早めけり 夢心
早明戦帰路それぞれに着膨れる 玄鳥
冬めいて瀑布に光る水姿 互酬
短日やキッチンカーも早仕舞 小牧
木の葉枯れ揺れて落ちるは吾が如し 艸寛
冬めいて重い腰上げ冬支度 徹心
類齢（たいれい）や幸有れかすと初詣 互酬
三万の一人となりて師走の国立 小牧
秋寒や晩酌焼酎お湯割りに 夢心
蕎麦好む男三人冬隣 玄鳥

『句会後記』

句会は安居玄鳥氏の司会で進められましたが、投句を読み上げた後、先ず會員の感想なり選評を発表してもらい、その後で作者の解説がなされると云うものでした。しかしながら、極めて個人的な体験の内容の句であったりすると、作者の弁がないと意味不明で、解釈に苦しむものがあります。それでも意見を交換するうちに共通の理解が得られるようになるというのが、句会の効用かと思えます。

（無心記）

先月に引き続き、今月も投句・選句共に4句ずつの句会でした。安居玄鳥氏の司会で進められました。が、投句を読み上げた後、先ず会員の感想なり選評を發表してもらい、その後で作者の解説がなされると云うものでした。

従来は、初めに作者が自句を読み上げて作句の背景などを語った後、会員の感想や選評がなされるという形でしたので、順序が逆になっていて若干戸惑いました。極めて個人的な体験の内容の句であったりすると、作者の弁がないと解釈に苦しむものがあります。順序が違っても意見を交換するうちに共通の理解が得られるようになるというのが、句会の効用かと思いました。

今年一年会員一名の退会がありました。が、交譲葉二号も發刊出来、会が無事続けられたことを嬉しく思います。今日は偶々上皇さまの卒寿の誕生日、上皇さまの長寿にあやかって交譲葉句会も末永く続けていければと願っています。（無心記）